解説　銅鐸とはどんなもの？

銅鐸とは、朝鮮半島の小形の鳴り物（朝鮮式銅鐸）を元に、弥生時代の人々が作った日本特有の青銅製品です（図6）。弥生時代前期末頃から作られはじめ、弥生時代の終わりまでの約500年間、農作物の豊作を祈るマツリの道具として使われたと考えられています。銅鐸は、近畿地方を中心に、全国で約500個程度が確認されています。

銅鐸は吊り手の形から大きく4つのタイプに分けられており、小型のベルから、大型品へと変化しました（図6）。

図 6　銅鐸の名称と変遷
奈良県立橿原考古学研究所(編)2009『銅鐸－弥生時代の青銅器の生産－』から引用

3 銅鐸の出土が意味するもの－天満･宮西銅鐸の価値を考える－

県内で21例目の銅鐸（表1）である天満・宮西銅鐸を考える場合のポイントは以下のとおりです。

1 最終段階（突線鈕5Ⅱ式）の銅鐸に絵画が鋳出されており、全国で最も新しい絵画銅鐸であること。
2 最終段階の銅鐸の分布する範囲について、見直しが必要となったこと（図7）。
3 意図的に割られたのちに捨てられたと考えられること。
4 大型の破片であること。

天満・宮西銅鐸が出土したことで、最も新しい銅鐸の絵画とそれよりも古い銅鐸の絵画を比較できるようになりました。天満・宮西銅鐸は、現在のところ、最終段階の銅鐸の絵画を知ることができる唯一の資料です。銅鐸絵画の変化を観察することで、銅鐸のマツリの変化を捉えることができるかもしれません。

また、今回の銅鐸は、大型の破片であることが重要と考えられます。天満・宮西銅鐸は、割られたのちに捨てられた可能性があることから、銅鐸のマツリをやめるという意思表示をしているという見方ができます。一方で、銅鐸は銅の素材としても価値があると考えられることから、再利用するために集落に運ばれたものが、何らかの理由で捨てられたという見方もできます。破片になった背景を複数考えられるという点で、重要な資料と考えられます。

表 1　香川県出土の銅鐸一覧

番号	名称	出土地	型式	文様	高さ（cm）	出土年
1	我拝師山	善通寺市吉原町我拝師山北面	Ⅱ－２式	二区流水文	29.8	1965
2	古川	観音寺市古川町南下	Ⅱ－２式	二区流水文	45.8	1923
3	伝香川県	香川県	Ⅱ－２式	四区袈裟襷文	32.7	
4	明神原	坂出市加茂町明神原	Ⅱ－２式	四区袈裟襷文	35.8	1933
5	安田	小豆郡小豆町安田	Ⅲ－１式	四区袈裟襷文	31.2	1934
6	陶内間	綾歌郡綾川町陶内間	Ⅲ－１式	四区袈裟襷文	29.7	1926
7	森広	さぬき市寒川町加藤字森広	Ⅲ－１式？	四区袈裟襷文	30.7	1978
8	伝香川県	香川県	Ⅲ－２式	六区袈裟襷文	42.7	1817以前
9	羽方	三豊市高瀬町羽方字西ノ谷	Ⅲ－２式	六区袈裟襷文	42.4	1927
10	白山	木田郡三木町下高岡白山	Ⅲ－２式	六区袈裟襷文	42.6	1872？
11	源氏峰	高松市牟礼町源氏峰ノタバ	Ⅲ－２式	六区袈裟襷文	現高39.1	1904
12	吉野（八幡）	仲多度郡まんのう町吉野	Ⅲ－２式	六区袈裟襷文？	破片	1949
13	大麻山	善通寺市大麻町大麻山	Ⅲ－２式	六区袈裟襷文	40.2	1806
14	旧練兵場	善通寺市仙遊町	Ⅲ－２式	六区袈裟襷文	破片４	2003
15	伝善通寺	善通寺市善通寺五重塔下	Ⅳ－２式 近畿ⅡA式	六区袈裟襷文	約51.6	
16	北原シンネバエ	善通寺市北原シンネバエ	不明			1868以前
17	北原シンネバエ	善通寺市北原シンネバエ	不明		34.7	
18	田潮八幡	丸亀市土器町青野山麓田潮八幡付近	不明			1942
19	伝木田郡	木田郡	不明			
20	伝仲多度郡	仲多度郡	不明			
21	**天満・宮西**	**高松市松縄町**	**Ⅳ－５Ⅱ式**	**六区袈裟襷文？**	**破片２ 現高約49.5**	**2016**

本表は以下の文献を参考に作成した。
一山 典2003「四国地方の銅鐸」『シンポジウム 銅鐸の謎をさぐる－講演・報告要旨－』徳島市教育委員会
島根県教育委員会（編） 2002『島根県古代文化センター調査研究報告書12 青銅器埋納地調査報告書Ⅰ（銅鐸編）』

図 7　突線紐式銅鐸等の分布
島根県立古代出雲歴史博物館(編)2012
『弥生青銅器に魅せられた人々』の図に加筆して使用

特別陳列
天満･宮西遺跡出土の銅鐸
－最も新しい絵画銅鐸－

編集発行
高松市埋蔵文化財センター
高松市番町一丁目5番1号
tel 087-823-2714
http://www.city.takamatsu.kagawa.jp//886.html

特別陳列
天満･宮西遺跡出土の銅鐸
－最も新しい絵画銅鐸－

平成28年3月23日、高松市松縄町の天満･宮西遺跡の試掘調査で、銅鐸の破片が出土しました。高松市では２例目の銅鐸であり、さらに全国で最も新しい絵画銅鐸であるということが分かりました。

天満･宮西銅鐸を御覧いただき、銅鐸が使われた弥生時代終わり頃の高松がどのような社会だったのか、一緒に考えてみましょう。

1 高松平野の弥生時代後期の中心集落 天満･宮西遺跡

天満・宮西遺跡は、高松市松縄町にある弥生時代前期及び弥生時代後期～古墳時代前期初頭を中心とする集落跡です(図 1)。天満・宮西遺跡の集落が最も栄えたのは、遺構・遺物の数が増える弥生時代後期末(約 1800 年前)と考えられます。

平成元年度に本市教委が行った発掘調査(図 2)で、多くの竪穴住居跡を確認するとともに、集落の北東側を流れる自然流路(SR01)から、大量の地元産の土器や、お墓を飾る特殊器台、吉備・安芸・伊予など他地域の土器が出土しました(写真 1 ～ 3)。多数の竪穴住居跡、他地域との交流を示す出土遺物などから、天満・宮西遺跡は、弥生時代後期の高松平野における中心的な集落と考えられます。

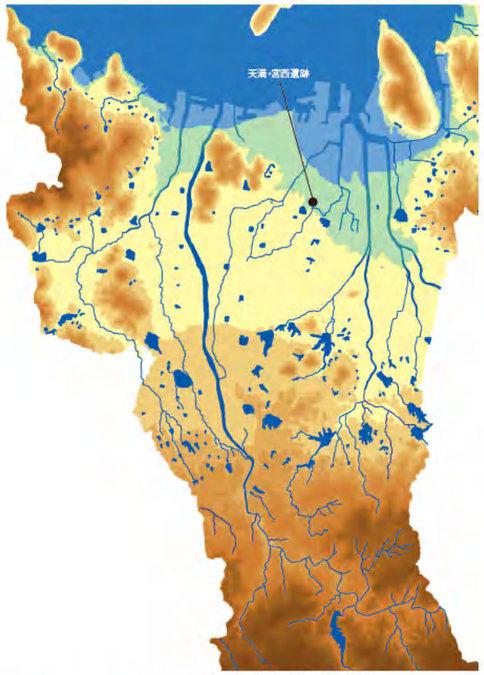

図 1 天満・宮西遺跡の位置

写真 1 天満・宮西遺跡 発掘調査時の様子(西から)

写真 2 天満・宮西遺跡 発掘調査 SR01 とその周辺(南西から)

写真 3 天満・宮西遺跡 発掘調査 SR02(北から)

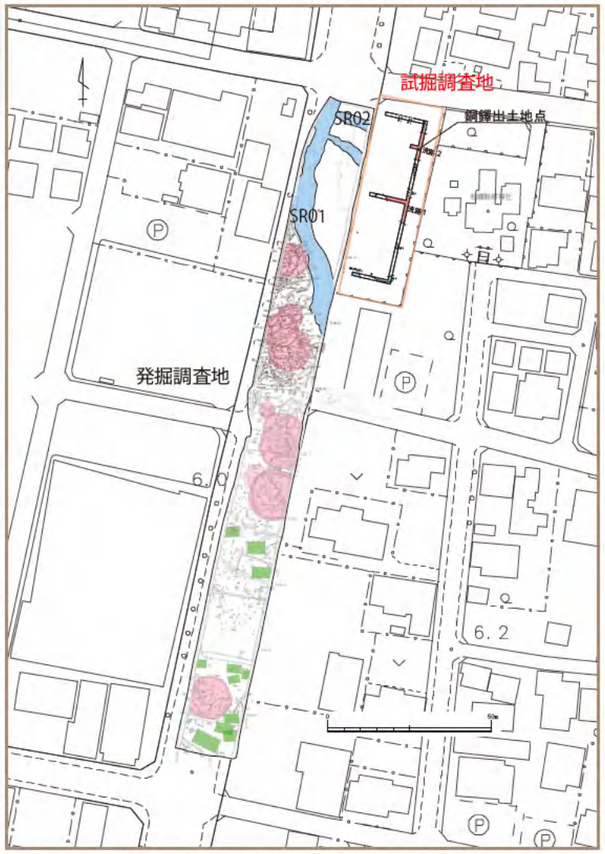

図 2 天満・宮西遺跡 発掘調査の検出遺構

2 全国で最も新しい絵画銅鐸 天満･宮西銅鐸とは

◇試掘調査の成果

銅鐸が出土したのは、以前、発掘調査した天満・宮西遺跡の集落から自然流路を挟んだ対岸です(図 3)。試掘調査では、溝や自然流路を検出しました(図 4)。銅鐸の破片は、流路 2 の最下層から出土しました(写真 4･5)。銅鐸を埋めるために掘った穴は存在せず、銅鐸は出土地に近い場所から捨てられたと考えられます。

流路 2 は、確認した位置や土層の堆積状況から、西側で発掘調査された SR02 の東側延長部分にあたると考えられます(図 2)。

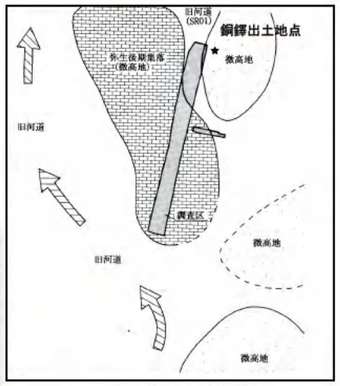

図 3 遺跡周辺の地形

写真 4 銅鐸の出土状況(復元：北東から)

写真 5 流路 2 断面(北西から)

◇出土した銅鐸の概要

出土した 2 つの銅鐸片は、破片同士が接合できる同じ銅鐸の破片です(図 5)。残された高さは約 49.5 ㎝、幅は約 34.5 ㎝、厚さは約 4 ㎜、重さは約 4.1 kgです。他の事例から、本来の銅鐸の高さは 1m以上あったと考えられます。

天満・宮西銅鐸で特徴的なのが、外面に肉厚の突線を配置することです。各 3 条の突線によって区画されることから、見る銅鐸として使われた「突線鈕 5Ⅱ式(近畿式銅鐸)」という種類の銅鐸となります。これは最も新しい銅鐸と位置づけられます。

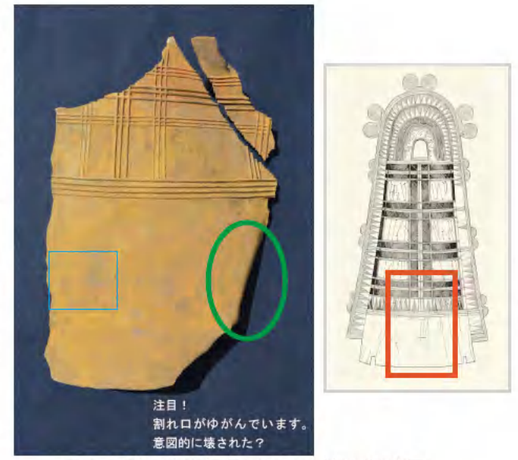

図 5 天満・宮西銅鐸と破片(赤線部分)位置
財団法人徳島県埋蔵文化財センター(編)2002『矢野遺跡Ⅰ』に加筆

◇銅鐸に描かれた絵画

天満・宮西銅鐸には動物の絵画があり(写真 6)、全国で最も新しい絵画銅鐸ということが分かりました。絵画の形は、かなり簡素化されていますが、鳥ないしはシカの可能性があります。

絵画銅鐸は全国で 60 例以上が見つかっており、人間・シカ・イノシシ・鳥などがモチーフとして選ばれています。絵画銅鐸は、当時の習俗を知る手がかりとなります。

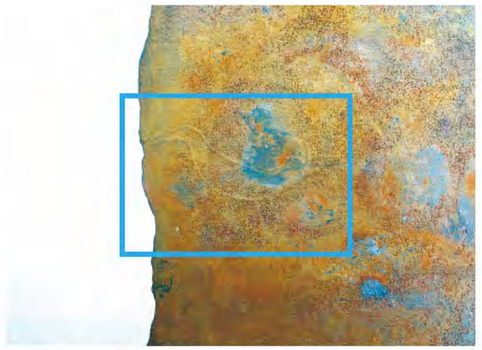
写真 6 天満・宮西銅鐸の絵画(画像の色調を加工)

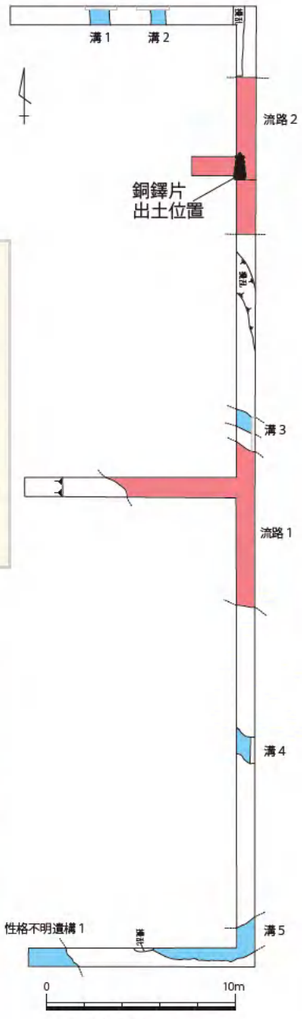

図 4 試掘調査 平面図